

ひきこもりをめぐる一当事者研究

－ひきこもり臨床における詩集の効用－

日本大学生産工学部 山岸 竜治

「あのな、中学校の終わり頃から、おれはセラピストのところに定期的に通ってたんや。親とか教師とかに、行け言われてな。学校でその手の問題をちょくちょく起こしてたわけや。つまり普通やないということで。けど、セラピーに通って、それで何かがましになったかという、そういう感じはぜんぜんない。セラピストなんて、名前だけは偉そうやけど、ええ加減なやつらやで。わかったような顔して、人の話をうんうん言うて聞いているだけでええんやったら、そんなもんおれにかてできるわ」（村上，2014，pp.102-103）

「——あいつ、治療が終わった暁には、シーモアよりももっとひどいことになってるぜ」（サリンジャー，1986，p.121）

1. はじめに

報告者（以下で「私」を用いる場合もある）は、本年（2017年）11月3日、第60回日本病院・地域精神医学会総会（@まつもと市民芸術館）において「ひきこもり臨床におけるカウンセリングとそれ以外——当事者青年のその後から」との演題で報告（口頭発表）を行った。本報告はその続報に位置付けられるものであり、前報告を部分的に掘り下げたものである。

2. 問いと方法

報告者は今日いうひきこもりの当事者である。そうなのは1985年4月頃、満18歳の時であり、その頃から1994年7月までクリニック（精神科病院の分院）の精神科外来で医師による若干のカウンセリングと薬物療法を、1994年7月から2003年3月まで大学病院の精神科外来で心理士によるカウンセリング（60分のセッションを2週間に1度の割合）を、それぞれ経験した。いずれにおいてもボイコットの中断が2回程度あったが、結果的にそれぞれ10年間弱、治療的関係をクライアントとして継続的に経験した。そうこうして、ひきこもりではなくなり、大学及び大学院に入学し卒業（修了）した。更にひきこもり当事者の関門である経済的自立を遂げてゆくことになる。

しかし、ではそれで、精神医療やカウンセリング（心理臨床）といった、いわゆる「治療」の有効性を、ユーザー（消費者）として積極的に評価するのかといえ、決してそういうこと

はない。全く効かなかったとはいわないが、余り効かなかったし、少なからぬ時間をつぎ込んだことを勘案するならば、余りにも効果が低かった、といわざるを得ない。さて、治療が大して効かなかった（と少なくとも本人が感じている）のであれば、何が効いたのか——この問いは、報告者の心の整理にとどまらず、ひきこもり臨床における効用の提示につながっているのではなかろうか。

本報告では、上記の問いを当事者研究によって考察する。当事者研究については、「当事者研究には、いわゆる決まった手順はありません。テーマ設定も研究方法も基本的に自由です」（べてるしあわせ研究所・向谷地，2009，p.42）とされ、最新の手引書の類においてもこの定義が引かれている（綾屋，2017，p.74）。

ひきこもり当事者である報告者は、いわゆる「履歴書を埋められない」数年間を過ごした後、1994年4月に満27歳で大学（日本大学文理学部教育学科）に入学して以降は、概ね問題のない社会生活を送っている。ひきこもり自体からは既に一定の年月が経過したといえ、過去のあれこれに対する評価も安定してきたので、知見と心得るものを以下に示したいと考える。

3. 3冊の詩集

治療がさして効かなかったのならば、それ以外にどのようなものが効いたのか——この問いに、ここでは、3冊の詩集が効いたと回答したい。ひきこもり臨床における効用の測定は、

A Study on Hikikomori by Experienced Person
－ Effectiveness of Poetry in Clinical of Hikikomori －

Ryuji YAMAGISHI

もとより定量化の困難な事柄である。以下では、どのように効いたかを論じることとする。

3. 1. 入沢康夫詩集『漂ふ舟』

『漂ふ舟』には、若い頁に次の詩句が記されている。

人々の話は 細部において全てことなつてゐる (入沢, 1994, p.13)

カウンセリングにおいてセラピストというのは、実は自分に都合のよいようにクライアントの言葉を受け取っている。そのことによって、つまり話した内容が歪められて理解されていることによってクライアントは傷つく。

そもそも人間というのがそういうものだから、それは仕方がない。ただ、入沢の詩句を知らなかったら、私はそのことに気づき得ず、外傷体験を繰り返していたかもしれなかった。

3. 2. 吉田加南子詩集『定本 闇』

『定本 闇』では、光と闇をめぐって、平明な言葉による明晰な考察が繰り返される。そして、終盤、次の詩句がたちあられる。

おいで／光の種子たち／／

わたしのなかで／おまえたちを／光の芽に育ててあげる／／

熟したとき／わたしを裂いて発ってゆく

おまえたち／／ (吉田, 1993, p.218)

上記の言葉のつらなりは、私には圧倒的なクライマックスの出来と感じられる。と同時に、回復のイメージとして私の中に取り込まれた——回復とは再生である、として。(なお、この詩人にはその後、科目等履修生として直接フランス文学を教わる機会を得た。)

3. 3. 松浦寿輝詩集『女中』

『女中』は小さい詩集である。そして病的に美しい。

私はひきこもりであると同時に強迫性障害(OCD)に悩まされていた。手を洗い過ぎるので、掌の油分が抜けひび割れていることもあり、緊張から掌自体が強張っていた。

『女中』という小さな美しい詩集は、自ら

に触れるよう、そして自分の頁を捲るよう、私の掌を誘惑した。私は触らずには、また頁を捲らずにはいられなかったのだが、結果、私の掌の強張りは緩むのだった。まるで冷たさで悴んだ手を湯につけたように、である。勿論、詩句も幻想的で美しい。例えば——

「おまえは わたしだ」(松浦, 1991, p.78)

という科白がある(山岸凉子の漫画の科白らしい)。だが、誰が誰に対していつているのかは謎で、読者は迷宮に引き入れられる……。

4. おわりに

私には忘れがたい3冊の詩集がある。人生を変えた種類の本ではない(『定本 闇』以外は)。自身のひきこもり臨床において、薬物のように効いたから、それらは忘れがたい。

なぜ詩集か、という新たな問いに答える紙幅はない。ただ、3冊の詩集全てが池袋の西武百貨店にあった「ぼえむ・ぱろうる」という詩歌の専門店で購入されたことを書き足しておく。

ぱろうるは大学病院の帰り道に存在した。私は2週に1度、心理士相手に約1時間喋り続けた後、ぱろうるに立ち寄り1冊の詩集を求め、それを読みながら1時間以上電車に揺られて千葉に帰ることを何年か繰り返した。大学病院への通院がなければ、ひきこもり臨床における詩集の効用を私は知り得ず、回復は違った形になっていたと思われる。回復が順調に進まなかった可能性もある。トータルで見れば、私が大学病院に通ったことは有意義だったといえる。

治療的な効用を持つ何ものかは、治療そのものの周辺にも潜在的に存在していると思われる。それが、私のいう「カウンセリングとそれ以外」の「それ以外」である。

【文献】

綾屋紗月「当事者研究をはじめよう!——当事者研究のやりかた研究」熊谷晋一郎(編)『みんなの当事者研究(『臨床心理学』増刊第9号)』pp.74-96, 金剛出版, 2017年。

べてるしあわせ研究所・向谷地生良『レッツ! 当事者研究1』特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構, 2009年。

入沢康夫『漂ふ舟』思潮社, 1994年。

松浦寿輝『女中』七月堂, 1991年。

『女のいない男たち』文藝春秋, 2014年。

サリンジャー, J. D. (野崎孝訳)『フラニーとゾーイー』新潮文庫, 1986年。

吉田加南子『定本 闇』思潮社, 1993年。